

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

東日本大震災から4年目になろうとしている今、求められている「ヨソモノ」の関わり方が変化してきていると感じている。今までの活動を通して、震災当初は、瓦礫撤去や散乱物の整理だったり「力」と「人数」が求められていた。それと同時に、「心の支援」として話し相手となったり、真に求められているものは何かを探るためのニーズ調査を行った。瓦礫撤去が落ち着く頃には、風化防止を掲げる中で高齢者の孤独死や仮設の中での孤立化を防ぐ為の見守り活動や交流活動であったり、子どもの遊び場の確保など、人に寄り添う支援が多くなったと感じた。このことから、「継続的な支援」が求められたと考える。そして今回は、仮設住宅内でのコミュニティ強化と他の仮設住宅の住民とのコミュニティ形成のきっかけを求めていることを感じた。それは、仮設住宅から復興住宅に移り変わる中で、今の段階からより多くの住民同士でコミュニケーションを図ることで転居後もスムーズな住民同士のコミュニティ形成に繋がる為だと考える。

今回の学生による仮設住宅向けの新聞発行企画は現在求められているコミュニティ強化や新たなコミュニティ形成に良い影響をもたらす企画だと考える。理由は、仮設同士の情報がお互いわからないままであったが、互いに仮設でどんな活動を行っているか、新聞により最前線の情報を共有することで、仮設同士が繋がるきっかけとなると考えたからである。話し合いをさせて頂いた甲子 B 仮設の住民の方々は、イベント活動に積極的であった。故に学生を受け入れる体制や姿勢が整っており、学生にとっても非常に活動しやすい場であったと感じた。この甲子 B 仮設が、周りの仮設の住民を巻き込む中心的な存在になると考えられる。また、話をさせて頂く中で、いきなりイベントを通して他の仮設住民と関わりを形成するのではなく、情報の共有から警戒心を解いていき、顔の見える関係を築いていくことが、スムーズにコミュニティを形成する手段なのではないかと改めて感じた。

新聞発行に関する話し合い以外に活動した、餅つき大会のイベントを通して、この甲子 B 仮設はイベントに出てこれられない方々への配慮、声掛けが盛んであったことに驚いた。一件一件回り、挨拶をする姿をみて、新聞発行で学生がただ情報共有の場をつくりだして行くのではなく、その過程に実際に住民の方と関わりを持つことが重要であると感じた。顔が見える存在の方が安心すること

はもちろんだが、顔見知りになることで、相手が自分たちに興味を抱いてくれ、それにより参加意欲が増加すると考えられるからである。今後はこの住民との関わり合いがどれだけ出来るのかが課題になってくると考えた。また、関わりあう中で、情報提供をしてもらうための信用の獲得はもちろんのこと、私たち世代が少ない仮設にとって、話し相手としても、パワーとしても求められている存在であることが、住民の方からの「イベントをやりにくるだけでなく、ただ遊びに来て欲しい。」という言葉から感じた。

直接住民の方と関わるイベントを通して、住民側にとってだけでなく、学生側にとってもこのような場が、沢山の学びや気づきに繋がっていると改めて感じた。餅つき大会一つをとっても、私個人、餅つきをしたことがなかった為、日本の伝統的な文化を体感出来たり、その中で住民のお母さん方に作法を教えて頂いたりと学校では教えてもらわない学びがたくさんあった。そして、何か一緒に作業をすることで、言葉のいらぬコミュニケーションがとれることを感じた。言葉以外でのコミュニケーションを用いることは、言葉よりも存在を近く感じることがあると思うので、その点でも直接関わりあうことは重要だと考えた。

住民の皆さんのそれぞれの価値観を知ることで視野が広がり、今後の活動においても重要な参考になる。今回の活動で日本一の仮設にしたいとの言葉が印象的であった。その住民の想いを知ることは今後において大切であると感じた。また、イベントに協力している他の団体の方と知り合うと「学生だから出来ること」や「自分たちの役割」を考えるきっかけとなる。何より、普段関わりの少ない大人と知り合うことで人間力が磨かれると考えた。

これからも継続的に活動できるように、私の出来ることを後輩に繋げていけるように共に考え、共に活動していきたい。

